



独立行政法人 国立病院機構

# 四国子どもとおとなの医療センター

## 今月のショット

京都モーネ工房さんから届く「しりとり絵本」。院内のニッチの中に。



2014年 8月号

## —院内の小さな声から—

地上庭園や屋上庭園は患者さんにとって大切な息抜きの場所で、どんどんいいものに育てていきたいと思っているのですが、水やり、草取り、植え替えなど日々の管理はとても大変です。行き届かないことがばりです。先日も地上庭園の桜の葉っぱが茶色くなって散ってしまいました。水不足？でも水やり担当のスタッフは日々、猛暑の中頑張ってくれています。専門家に尋ねると、水不足だけが原因ではなかったようですが、しばらくはがっかり落ち込んでしまいました。管理をプロの業者さんをお願いすれば簡単なのかもしれませんが、でも、できるだけ今いるスタッフとボランティアさんで協力しながら管理できないものか。と考えています。始めからあきらめてしまうと、その場所について「他人事」になってしまっていてそれ以上考えるのをやめてしまうからです。桜のことや草取りのことをいろんな部署のスタッフに相談していると(弱音をはいていると)ある日、企画課長さんが「事務局で草取りするよ。」と。管理課長さんが「水やり手伝ってくれるようお願いしたから」と言ってくれました。そして、保育士さんから「いい知らせだよ！桜に新芽が出てる！！」と報告が。とても嬉しい瞬間3連発でした。黙っていないで「助けて！」と言う事も大切だなあ。思いました。

## —ある日のこと—

「コン。コン。」と小さなノックの音。ドアの隙間から顔をのぞかせたのはいつもの男の子。後ろには作業療法士さん。男の子は両足に装具をつけています。「リハビリの度にニッチの扉を開けるのを楽しみにしているんです。ねっ。」作業療法士さんがそっと、包むようなまなざしで男の子の方を見ると、男の子は満面の笑みでうなづきます。男の子はボランティア控え室のテーブルの上に並べられた編みぐるみの動物たちを見て目を輝かせています。中でも一番大きくてカラフルなクマの編みぐるみが気に入ったようです。「この編みぐるみはね。90歳のおばあちゃんが、病院で頑張っている子ども達のために時々こうして届けてくれるんだよ。どうぞ。」と手渡してあげると、男の子はそのクマをぎゅっと胸に抱きました。一瞬、90歳のおばあちゃんの笑顔が見えた気がしました。「〇〇くん、よかったねえ。じゃあ、いいものもらったから今度はプレゼント配ってこようか。」作業療法士さんの声に男の子はクマを抱えたまま、今度はニッチの中に入れるギフトを選び始めました。「あ、これ知ってる。これ持ってる。これはなんだ？」折り紙のかたつむりやバラの花、一つ一つ手に取ってじっと見えています。「このメッセージは誰が書いてくれているんですか？」と作業療法士さん。ボランティアで毎月一回来てくださっている社会福祉協議会の皆さんや、コンシェルジュさんが協力してくれていることを伝えると、「中に入っているプレゼントは〇〇くんの楽しみだけど、私はメッセージを読むのをいつも楽しみにしています。面白い事や、はっとするような事が書いてあったりするの。」と話してくれました。男の子はいくつものギフトを紙袋に入れて、部屋を出ました。「では行ってきます。」と作業療法士さん。「サンタさんみたいだね。よろしくお願ひします。」とお願いすると、男の子は「うん。」と、笑顔で大きくうなづきました。これからいくつものニッチにプレゼントを配って歩くのは〇〇くんにとって簡単なことではないけれど、その後ろ姿は、リハビリに向かう。というよりもむしろ、自分の役目を果たそうとしている頼もしい背中に見えました。



## 今月の一枚

作家： 富樫 奈月

涼